

藪の中の黒猫

2004(平成16)年5月4日鑑賞(第七藝術劇場)



監督＝新藤兼人／出演＝中村吉右衛門／乙羽信子／太地喜和子／佐藤慶（近代映画協会配給／1968年日本映画／108分）

……91歳の新藤兼人監督の『ふくろう』上映を記念して特集された新藤兼人作品集の1つ。侍に犯され、家を焼かれ、殺された乙羽信子、太地喜和子の2人の母娘が妖怪となって復讐する物語。さっき観たばかりの『ふくろう』の母娘の姿とも少しダブってくる……。1968年の映画だが、その斬新さにはあらためてびっくり。日本映画ここにあり！ と自慢したいものだ。

One of 「新藤兼人作品集」

本作は、新藤監督の91歳の新作『ふくろう』の上映に伴って、ナナゲイこと第七藝術劇場で上映されたもの。新藤監督は1950年、松竹を退社して、独立プロダクション近代映画協会を設立し、1960年『裸の島』でモスクワ国際映画祭グランプリを受賞。そして『鬼婆』（64年）、『本能』（66年）等を経て、本作に至った。

1968年＝昭和43年という時代

1968年といえば、昭和43年。そしてこの年は、私が弁護士のライフワークとしている「都市問題」についての最も根幹的な法律である、「都市計画法」が制定（改正）された年。「建築基準法」「都市再開発法」と並んで、「近代都市法」が確立した時代だ。そしてこの時代は、「日本列島改造論」をひっさげて華々しく田中角栄氏が登場し、日本が高度経済成長に向けて一直線に進み始めた時代だ。

私が大阪大学法学部に入学したのが昭和42年の4月。しかし入学後、すぐに大学紛争が始まり、私の学生生活はすぐに学生運動一色になっていったが……？

1968年に制定（改正）された「都市計画法」は、近時の「少子高齢化社会」到

来の下、「都市化社会」から「都市型社会」へという社会状況の変化をキーワードとして、2000（平成12）年に大改正された。そして私はこんな時代状況を受けて、『Q & A 改正都市計画法のポイント』（2001年・新日本法規出版）と、『わかりやすい都市計画法の手引（加除式）』（2003年・新日本法規出版）を出版した。そんな時代に公開された映画を、今あらためて観るとは思わなかったが……。

黒猫（？）の母娘は乙羽信子と太地喜和子

この映画のテーマは、侍に犯され、家を焼かれ、殺された百姓の母娘が、怨霊となって復讐するというもの。この母娘を演じるのが、乙羽信子と太地喜和子という、あの時代の看板女優だ。時代は平安時代の中期。大江山の酒吞童子^{しゅつんどうじ}を退治したのが酒田金時^{さかたのきんとき}。そしてこれを指揮するのは侍の棟梁、源頼光^{みなもとのかいこう}。侍が一躍脚光を浴び始めた時代だが、戦闘集団としての侍は同時に、家や村を焼き、女を犯し、食料を強奪するという極悪非道行為を平気でやっていたわけだ。

息子は中村吉右衛門

後半から主役として登場するのは、中村吉右衛門。百姓の倅の彼は、無理矢理侍に招集されて、東北地方の蝦夷討伐^{えみし}の戦いに連れて行かれた。敵の大將の首を討ち取るという大手柄を立てて、都に戻ってきた彼は、酒田金時や渡辺綱^{わたなべのつな}、卜部季武^{うべのすえたけ}、碓井貞光^{うすいのみつみつ}という源頼光の四天王と同列に取り立てられた。そのうえ、彼はその力を見込まれ、源頼光から妖怪退治の命令を受けてしまった。彼はその任務を果たすべく、勇んで妖怪退治に出かけたが……。そこで彼が見た妖怪は、何と自分の母と姉にそっくりだった。さあ彼はどうするのだろうか……。

今でも新鮮な新藤作品

この映画では、妖怪となった母娘がフワリフワリと宙を飛ぶシーンがある。これはまるで、最近はやりの『マトリックス』（99年・03年）や『HERO（英雄）』（02年）でのワイヤーロープやCGによる撮影と同じで、今観ても新鮮。また、平安時代ながら、題材はいつの時代にも通じるもの。名作は何年たっても十分鑑賞に値することをあらためて実感……。 2004（平成16）年5月8日記